

性狂育
— 美姉妹は幼き主の愛玩具 —

小日向諒

2/76



1/76

目次

序章	思い出
一章	契約
二章	春
三章	夏
四章	秋
五章	冬
終章	再契約

序章 思い出

美しさに目を奪われる——この慣用句は、姉のために作られた言葉ではないかと、
上之園雪奈は時折思う。長年同じ屋根の下で暮らし、毎日顔を合わせているのに、姉
の——上之園琴美の美貌に見慣れたことはただの一度も無い。

(はあ……ほんと、綺麗過ぎて溜息が出ちゃう……)

アクセサリーショップでネックレスを手に行っている琴美だったが、どんな優れた装
飾品とて姉の美しさの足下にも及ばない。周囲に点在する女性客も、絶世の美女と称
しても過言ではない女が、如何なる美意識の反映された品を手取るのか気になるの
だろう。自分達の買ひ物を疎かにし、琴美にちらちらと視線を寄越している。

(ま、妹の私が見とれるんだから、無理ないよね)

神秘的なまでに整った顔貌に、冬服の上からでも容易にわかる優美な肢体。袖口から覗く指はピアノリストの如くしなやかであり、ロングスカートに隠れた脚線は日本人離れした長さを有していると、ほっそりとした柳腰が優に語っている。

細筆で引かれたような柳眉に嫵やかな鼻梁。紅が落とされた唇は瑞々しさに溢れ、黒い絹を彷彿とさせる長い髪は女なら誰もが羨むだろう。

(はあ…：私も、お姉ちゃんの妹なんだけれどなあ)

店の性格上、至る所に設置されている鏡から姿見を探しだし、雪奈は自らの全身を映し出してみた。

気の強い性格が顕れたばっちりとした双眸に、十六歳の女子高生という若さの特権が反映された桜色の唇。

姉に引けを取らない雪肌はきめ細かく、染める気など更々無い艶やかな黒髪をうなじで二つに結び、躍動感に満ちたツインテールが背で跳ねる。

胸の膨らみは、トップバスト90センチオーバーの琴美と比べればささやかなものだが、腰より下ならば負けてはいない。桃を模した形の良い小振りの美尻に、タイトなミニスカートからは黒いパンティストッキングに包まれたしなやかな美脚が伸びている。

(うん、世間的には絶対良い女の部類だよな。私って)

友人達から雪奈は可愛いとよく羨ましがられる。眼中に無いのですべて一蹴しているが、同級生の男子から何人も告白されているし、休日に街に出れば確実にナンパだつてされてしまう。

そういった客観的な判断材料からも考慮すれば、自画自賛ながら自分の容姿は相当優れていると雪奈は思う。ファッションにだつて気を遣っているし、珍奇な流行と洗練された美の違いを見分けるセンスだつて年齢の割には磨かれている。

今一つ膨らみに乏しい胸回りでは負けていても、テレビやネットで見るアイドル達に遅れを取ったと感じる時は殆どない。

それでも、実の姉と肩を並べられたと感じる時はただの一度も無かった。

雪奈は男から声をかけられるが、琴美の場合はどんな軽薄なナンパ男でさえ声をかけない。遙かなる高嶺にある花は触れられないと、経験で分かっているのだろう。

「雪奈」

少女としての可愛らしさじゃなくて、姉のような女の美しさが欲しい——そんな高望みをしていると、ようやく品を選び終えたのだろう。琴美が小さく手招きする。

「決まったの？ お姉ちゃん」

「ええ。これなんてどうかしら。ほら、とつても可愛らしいでしょう？」

にこやかに微笑む琴美がチェーンを広げる。途端、無意識に雪奈の頬が引き攣った。
(これさえ無ければ……お姉ちゃんって完璧なんだろうけれどなあ)

大幅に譲歩すれば可愛らしい——忌憚なく述べるなら、間抜けなデフォルメのなされた銀の猫がぶら下がるネックレスを凝視し、心中で雪奈は眉間を押さえた。

その美貌もさることながら、穏和で慈愛に満ちた性格に加え、学歴も文句なしに高いという一見するとパーフェクトな姉だが、美的感覚だけはどうにも頂けない。

その一例として挙げられるのが、優艶な容姿とは掛け離れた可愛さ偏重主義だ。

もうじき大学一回生になるというのに、スタイリッシュな格好はおろか、どんなものにも大なり小なりの少女趣味が混入されている。携帯のテーマはキャラクターものばかりだし、ランジェリーはその大半がフリフリだ。

自室に至っては、ぬいぐるみの住処に琴美が居候している錯覚に捕らわれるほど、ファンシーな空間と成り果てている始末である。

(うう……困ったなあ)

このネックレスは、十六歳になった雪奈への誕生日プレゼントとして姉が選んでくれたものだ。大好きな姉の好意は素直に受け取っておきたい。反面、コレを首からぶ

ら下げて外を歩く姿を想像すると、雪奈の脳裏に形容しがたい憂鬱が積乱雲となって立ちこめてくる。

更に言うならば、雪奈の私服は一見するとフォーマルと見間違えるタイトなものが多いため、余計にこのヘンテコなネックレスを辞退したい衝動に駆られる。小学生の頃ならとにかく、女子高生になってこんなコミカルな装飾品を付けて歩くなど、何の罰ゲームなのだろう。

「特にこの猫ちゃん、大きな団栗眼が愛らしいと思わない？」

「あ、うん……そう、かな……？」

猫というより銀色の出目金みたいだ——と、目を綺羅と輝かせる姉の眼前では口が裂けても言えない。

(やば……お姉ちゃん、買う気満々みたいだし)

大人しい琴美にしては珍しいことに若干興奮しているらしい。雪奈の強張った表情に気付くこともなく、このネックレスが如何に可愛らしいかを力説している。

このままじゃ購入されてしまう——慌てた雪奈は周囲に視線を走らせ、琴美の注意をそらせるものを探そうと躍起になる。

「あっ——」

ほんの偶然だった。たまたま雪奈の目の止まる位置に、これ以上はない最高の装飾品が置かれている。

「お姉ちゃん。これ——」

それは、銀の鳥を模したネックレスだった。ちょうど、翼を羽ばたかせている最中を写し取った意匠らしく、大きな羽根が風を薙ぐように下ろされている。大きさは3センチもない小さなものだが、細かい箇所まで丁寧に彫り込まれており、シルバーアクセサリ独特の清らかな光沢が美しい。

「えっと……でも、雪奈。これって……」

姉の言わんとしていることは分かっている。雪奈の手にしたネックレスは、ペアアクセサリだ。恋人に贈るならば妥当だが、妹の誕生日プレゼントとしてはどう見ても不適切だろう。

「ううん。ペアだからいいの」

雪奈は小さく頭を振り、対となる銀の鳥を姉に持たせる。そして、鳥たちの嘴を触れ合わせ、飛翔する羽根の先端を揃えた。

二つのネックレスが合わさることで、銀のハートが描き出される。

いつまでも、大好きな姉と一緒に居たい——この銀の鳥は、敬愛する琴美にこそ持

っていて貰いたかった。

「雪奈——」

琴美の繊手が、雪奈の頭をそっと撫でる。

甘えん坊ね——そう、優しい繊手が物語っていた。

(だって、私はお姉ちゃんが好きだもん)

いずれ姉が——あるいは自分が家を出て、互いに離れて新しい暮らしを築き上げるのだろう。けれど、それまでは大好きな姉と共に在りたい。

小さい頃から、誰よりも妹を可愛がってくれた姉の愛撫に、雪奈はうっとりとし身を委ねた。

その幸せの足下で、既に崩壊の序曲が鳴り響いていたとも知らずに——。

(私達……どうしてこんなことに——)

人里離れた森の中に築かれた広大な洋館——その中に敷かれた、遠近感が歪むほど長く伸びる荘厳な回廊にて、雪奈は虚ろげな自問を繰り返す。

冷えた夜陰が少女の瑞々しい柔肌を引き締めるものの、黒く苛烈な現実が呪いと化して心身を蝕んでいくためだろう。寒さは殆ど感じない。

黄泉路を彷彿とさせる廊下には、ぼんやりとした灯りが等間隔となって壁に据え付けられている。暗がりを払拭するには脆弱な橙色の光は、まるで彼岸の鬼火を連想させた。

(目が、おかしい……)

眠気に襲われているわけでもないのに、視力2.0を堅持した裸眼に映る光景は、さながら風が水面を波立たせるが如く乱れた。

(お姉ちゃんの後ろ姿も……)

雪奈のすぐ前を歩く、琴美の後ろ姿が奇妙に歪んでいた。長い後ろ髪を結っている白いリボンが幽霊のように朦朧としている。

ふと、大きな窓の前で雪奈は立ち止まった。

町灯りはおろか街灯一つすら見あたらない冷たい窓硝子に、屋内灯に照らされた銀のペアネックレスと己の横顔がぼうと浮かび上がる。

(これ……本当に私なの……)

窓の向こうにある暗い樹木を背景にした貌が、更に少女の心に闇を注ぐ。アルバムの中に収まっていた自分の写真は、いつだって躍動と活気に満ちていた。今、窓硝子に映る女子高校生は、悲愴と絶望に浸されており、まるで瞬きする死人だった。

(こんなの……こんなの、私じゃない……?)

硬く口端を絞り、皓歯を結ぶ。雪奈が心底に散らばったプライドを掻き集め、それを激情の暖炉にくべることで自らを焚き付けると、異常を引き起こしていた視界が、僅かだが回復の兆しを見せた。

小柄な外見に似合わず雪奈はとても気が強い。売られた喧嘩は買う主義だし、小学生の頃、背の小ささを馬鹿にしてきた男子を、あらゆる手段で何度泣かしたことだろう。成績優秀で、何より運動能力が抜群に高く活発な性格の雪奈は、いつも友人達の中心にいた。それこそが、雪奈のアイデンティティでもある。

(私は……強いんだ……)

自分は強い——そう自負していた。

何者にも負けず、困難を打ち倒して成長していく未来像を信じて疑わなかった。

(私は強い……強いはず、なのに……)

今の雪名を示す身分が、確固としていた自尊心を突き崩そうとしている。

奴隷——。

それが、姉妹の首に繋がれる透明な首輪の名だった。

(私とお姉ちゃん……何をされるの……)

未成熟な女体に値を付けられ、家畜の如く売り払われた事実が、十六歳の頸筋を蒼く粟立たせる。想像される未曾有の惨苦が留まるところ無く肥大と暴走を続け、一步廊下を進むごとに猛毒となって雪奈の全身に拡散する。

「あっ——」

視界から唐突に平衡感覚が失われる。刹那、前のめりとなった身体が床に叩き付けられた。回廊には深い絨毯が敷かれてあったが、上半身前面から拡がる強い衝撃は小さな頭蓋を激しく揺さぶる。

(……何も、無いところなのに)

段差もない平らな床で受け身も取れずに無様に転がるなど、普段の反射神経からは考えられない。自分の心が不安と恐怖によって麻痺している証拠に戦慄を覚える。

「雪奈」

片頬が絨毯に沈み、横倒しになった視界の端から澄んだ声が聞こえた。

「大丈夫？ 雪奈」

目の前を歩いていた姉の琴美が、小走りに近寄り膝を着いた。いつも穏やかな微笑みを湛える優女の顔には、周章が駆けずり回っているのが見て取れる。

背後から鈍い音がしたと振り返ったら、いきなり妹が俯せになっていたのだ。常日頃から雪奈を可愛がってくれる姉が驚くのも無理は無い。

「……うん、平気。心配しないで、お姉ちゃん」

まだ僅かながら視界が不定形だったが、何事も無かったように立ち上がる。

極度の緊張によって碌に眠れず、ただでさえ白い肌に蒼が混じり始めている琴美に、

これ以上心配をかけさせたくなかった。強張った頬に意識を集中させ、急造の脆い微笑みを形作る。少しでも琴美を安堵させたかった。

「身体に傷は御座いませんか」

抑揚のない男の声が、しんと冷える空気を打つ。琴美より先に立ち、姉妹を先導していた老執事の相城が、表情一つ変えずに雪奈を見下ろしていた。

「……平気よ」

口の中が少し切れたらしい。微かな鉄の味が舌を不快にするが、この程度の怪我などいちいち報告する必要もない。なにより、個人の安否を気遣うというより、商品の状態を問うような無感情な物言いには、何が何でも反抗したくなる。

敬老精神など微塵も含ませずに雪奈が応じると、老執事は老執事で無駄な会話をするつもりはないらしい。後は一顧だにせず、矍鑠とした動きで歩みを再開する。

「行こ、お姉ちゃん」

抱き起こしてくれた琴美の手を取り、雪奈は人間味の希薄な老人の背を追う。

とんだアクシデントだったが、今の衝撃によつて諸々の不安要素が身体の外に叩き出されていた。雪奈は拳を握り締めると、この先にいるであろう外道と対峙するための闘争力を奮起させる。

（頑張れ、雪奈……もう私だけしか、お姉ちゃんの味方がいないんだから）

誰よりも雪奈を可愛がり、誰よりも優しい姉を守れるのは、この世界には自分だけしか残っていないのだ。

和菓子の『櫻姫』——創業百年を越える家業の崩壊は、呆気ないほど一瞬だった。三年連続の冷害による小豆と餅米の高騰は、国産原料の使用が売り文句でもあった『櫻姫』の仕入れを困窮させ、再開発地区の爆発的な発展が客離れを加速させた。

そして、老朽化した機器を刷新するための激しい設備投資と、最悪のタイミングで訪れた海外からの金融恐慌が、破滅を招く暴風と化して上之園を呑み込んだ。

銀行が無情にも融資の引き上げを告げた瞬間『櫻姫』は帰り咲く間もなく枯死した。上之園は本家分家を問わず離散の危機に直面し、親族が散り散りになるのは最早時間の問題だった。

『櫻姫』に融資を行いたい——誰もが望み、そして決して叶わないはずの話が唐突に舞い込んできたのは、年が明けてまだ幾許も無い、ある雪の降る日だった。

ただし、融資の条件として上之園琴美を一年の間、さる方の奉公に出すこと——。

使者である老紳士の語った内容が何を意味するのかを理解した時、琴美の両親の顔からは血の気が消え失せる。銀行の貸し付けがままごとに見える莫大な融資の提示は、逆にどれだけ日常と掛け離れた状況に置かれるのかを雄弁に語っていた。

「近日中に御返事を伺いに参ります」

蒼白いを通り越して土気色に肌の色を変えていた両親を余所に、使者は淡々と用件を述べて席を立つ。

だが、熟考するまでもなく、琴美は帰路に就こうとする使者の前に立った。

滅多なことでは声を荒げない温厚な父が、喉が裂けんばかりに娘の名を叫んだ。母が声にならない嗚咽を漏らす。

（私は、無事に戻れないかも知れない……けれど……）

非合法な取引ではあるものの、見返りとして法外な融資が引き出せるなら、やはりこれはチャンスなのだ。このままでは大切な家族がバラバラになる。

（それに、もし返事を延ばしてしまつたら――）

残念ながら上之園家は一枚岩ではない。時間が経てば一部の心ない分家達が、自分の生活を守るため、懊悩する両親に詰め寄り「琴美を差し出せ」と胸間声を張り上げるだろう。親族会議となれば、父が親心と『櫻姫』の総代としての責任の間で板挟

みになり、母が辛苦に苛まれる未来は火を見るよりも明らかだった。

床に手を付き、泣き噎いで自らの不徳を詫び続ける両親の苦悶を背に受けながら、琴美は老人へ丁寧な頭を下げ、この悪徳の契約を結ぶ意を示した。

「お姉ちゃんが売られるなんて、絶対に許さないっ」

しかし、琴美の心境とは関係なく、一人だけ頑なにこの許されざる奉公に反対し続けたのが、妹の雪奈だった。名前に付けられた雪の字に似つかわしくないどころか、まったく正反対な炎のような性格は、敬愛していた琴美が売り払われると聞いて活火山さながらに煮えくりかえっていた。

その言動は手の付けようが無く、娘を売った両親を有らん限りの言葉で非難し、親としての矜持を熾烈に問責し、琴美の説得にもまるで聞く耳を持たない。

雪奈の抉るような叱声は概ね正鵠を得ており、両親はただ拳を握り締めて耐え続けるしかなかった。その惨禍を見かねた分家の人間にも雪奈は無差別に噛み付き回り、事態は泥沼の様相を呈していく。容赦の無い雪奈の舌鋒に激昂した何人かが「子供は黙っている」と声を荒げるが、まだ十六歳になったばかりの雪奈は微塵も動じない。

「対岸から責任だけ押しつけて、他人の子供を売り払って胸を撫で下ろしてるクズの分際で気安く口を開くんじやないわよ！」

半ばキレていた雪奈の齒に衣着せぬ痛烈な罵倒は留まるところを知らず、細身の体を仁王立ちさせ徹底的に大人達を糾弾した。

「いいわ。アンタ達はもう一切親族だとも思わない。絶縁よ」

あと少しで取っ組み合いになりかねない状況で、吐き捨てるように雪奈は切り結ぶ。そして、暴れだしそうな雪奈の肩を後ろから押さえていた琴美へ振り返り「お姉ちゃん」と真っ直ぐに見据えてきた。

「私、お姉ちゃんと一緒に売られる」

実の娘が売られていくのを引き留められなかった両親に、我慢がならなかった。代償として支払われる汚れた金で生き延びようとする親族達に、虫唾が走った。

何より、大好きな姉が辛酸を嘗める最中、のうのうと日常を営んでいる未来の自分が絶対に許せなかった。

（私は、お姉ちゃんの妹なんだから）

それまで宥め役に回っていた琴美だけが血相を変えて雪奈の私案に反対したが、それまで散々悪態を浴びせられていた親族達の反応は冷ややかなものだった。

両親は枯れ木の軋むような声をあげて思い留まらせようとしたが、結局渋面を作って沈黙した。親として、一度断言したらテコでも動かない雪奈の性格を熟知していたからだろう。いや、こんな突飛な愚案など、所詮先方に通らないとたかをくくっていたのかもしれない。

ところが、外道な融資を持ちかけてきた連中へ件の要望をねじ込んだところ、拍子抜けするほどあっさり話は通り、当の雪奈自身を驚かせた。

（本命はあくまでお姉ちゃん…：大魚を釣り上げたら、尾びれに雑魚が食い付いてきたようなものなんでしょうね）

考えてみれば、連中としては琴美の獲得が最優先される目標なのだ。雪奈というオマケがくつついてきても別段支障はないのだろう。それはそれで腹立たしい話だが、姉をたった独りで人買いの元へと送られる事態は避けられたのでよしとした。

（さあ、行くわよ雪奈）

先行していた老執事が重厚な扉の前で立ち止まっていた。

この先が伏魔殿の本丸なのだろう。雪奈は浅く呼吸を整え、下腹に力を込める。見かけに反して音もなく扉が開かれ、ゆっくりと部屋の内部が明らかになっていく。

（絶対に、お姉ちゃんを守る）

それが到底実現できない儂い決意だと理解している。
それでも諦観の沼に引きずり込まれるわけにはいかない。
雪奈は細く冷たい姉の指を強く握り締めた。

自分は状況判断に秀でている——と、雪奈は思う。

親族をまとめて敵に回して一歩も引かずに立ち回れたのは、相対した状況を的確に分析し、反駁していたからだ。今まで口喧嘩で負けた試しがないのは、舌鋒もさることながら、この資質が大きなウエイトを占めているからだと自己分析している。

だから、いつだって慌てもしないし、動揺もしない。激昂する一方で心の側面では冷静に物事を観察し、適切な処理を半ば無意識に行っている。

(…：…：どうということ)

そんな不動の心が、今大きく混乱に揺らいでいた。

雪奈だけではなく、琴美も大きく——それこそ、今まで生きて来た中で最も大きな当惑に苛まれているのだろう。微かに首を回して姉を見ると、その美貌をマネキンの如く固めていた。

「やあ、ようこそ二人とも」

無理もないと思う。こうしてにこやかに目の前で微笑んでいる幼い少年が、姉妹を買付けた張本人——高苑寺章史だと、誰が見破れるだろう。

老執事から紹介が無ければ身なりが良い男の子にしか見えない。

(こいつが…：…：こんな小さな子供が…：私とお姉ちゃんを買った…：…？)

姉妹達には、事前に買い付けた人間に対する仔細を聞かされてはいなかった。

名前や年齢を始めとする基本的な情報は「今は必要御座いません」と慇懃に返されるだけで、この屋敷に着いてからようやく買い手が明らかとなった。

高苑寺——この国に居る限り、一度も系列企業にかかわらずに生きることではできないと言われる大財閥。歴史の教科書にも名が記された名家が、人買い紛いのことをやっているのだから、事前に名前を出さないのも判らないではない。

それこそ、スキヤンダルとしては最悪だろう。

(いや…：…：でも、ちょっと待ってよ)

そこまでは理解しても、まだ直面している相手に納得できない。そもそも、姉妹を買った少年は、雪奈の予想していた人買い像にことごとく反している。

一目見ただけで性根が腐っているとわかる醜怪な面構えで、贅肉で凝り固められた

肉の四肢を揺らし、蝦蟇にも劣る穢らわしい口を開きながら、狒々よりも下劣な性欲を濁った瞳に滾らせているクソ野郎――。

そんな、およそ十六歳の想像力をフル回転させて描き出した悪漢と、ここに居る高苑寺章史との間には、微塵も共通点が無かった。

(しかもこいつ……どう見ても私より年下じゃない……)

瞳孔だけを上下に動かし、雪奈は諸悪の根源を観察する。年齢は恐らく十歳を少し過ぎたところだろうか。見かけで判断するなら、小学校高学年くらいが妥当だ。

体付きは雪奈と同年代の男子と異なり全体的になだらかで、筋張った体躯にはまだ発展していない。精悍とは掛け離れた柔和な顔立ちはあどけなく、少し茶を帯びた栗色の髪がふんわりと流れている。くりっとした大きな鳶色の双眸と整った鼻梁が童顔を一層強調しており、見る者に小動物のような印象を振りまいていた。

靴から上着に至るまで、着ている物は素人目にも分かる程に上質な代物で整えられており、この巨大な館の住人であることを暗喩している。

少なくとも、こんな歪な出会いをしていなかったら、悪い要素の見あたらない身嗜みの整った美少年として雪奈は好印象を抱いただろう。

「君が上之園琴美だね」

雪奈が今まで抱いていた人買いの先入観を全力で修正する最中、章史は幼さの反映された人懐っこい微笑みを浮かべて琴美に近寄る。

「あ――は、はい」

雪奈と同じように、この状況を慌ただしく整理していたのだろう。急に話しかけられた琴美の声は少し上擦っていた。

「君が妹の上之園雪奈？」

「……そうよ」

どう反応するべきか迷ったが、相手は少なくとも表面上は友好的に接してくる。仕方無く、雪奈は渋々と応じた。我ながら不貞不貞しい態度だと思ったが、章史はさし言葉使いを気にしていないらしく、完爾とした表情を崩す気配がない。

「ふうん……事前に君達二人の写真を見ていたけれど……うん、琴美は写真よりずっと美人で、雪奈はすごく可愛いね」

さらりと姉妹の容姿を褒めてから、屈託無く章史は笑った。

(何か……掴みづらい奴)

こうして対面してからまだ間もないものもあるが、どうにもこの少年の思惑がわからない。何より、奴隷商の分際で全然やましそうな雰囲気が無いのが嫌だ。悪人なら悪

人に相応しい容姿と態度をするべきだと雪奈は思う。

「この館における貴女方の待遇について説明致します」

主との謁見が一段落したと見た老執事が、章史に一札して上之園姉妹に向き直る。

「待遇、ですって？ 奴隷同然の売春婦に、待遇なんて結構なものがあるの？」

宛がわれた身分には似つかわしくない言葉を目にし、雪奈は冷やかな皮肉を紡ぐ。「雪奈っ」と琴美から小さな叱責が飛んだ。姉の言わんとしていることはわかっている。こんなところで嘔み付いても状況が好転するわけでもない。むしろ、悪化する可能性が高い。それでも人を娼婦として買い付けておきながら、まるで客人のように待遇と宣うなど、人を嘗めきった態度にもほどがある。

「売春婦？ 君たち二人が？」

「何よ。違うとは言わさないわよ」

心底言っている意味が分からないとばかりに章史は眉を寄せる。そんな不思議そうな顔が雪奈の声に苛立ちを混ぜる。この屋敷に来る十日ほど前、経口避妊薬を渡され、必ず服用するように言いつけられていたのだ。これが何を意味し、そして姉妹に如何なる要請が向けられているのかは、どんな馬鹿な女でも理解できる。

どれだけ犯しても妊娠しない、性欲処理の女奴隷——これが、雪奈と琴美に与えら

れた主たる役割のはずだ。

「うん。それは違うよ。雪奈」

雪奈の無礼な言動が従者としての許容を超えたのか、老執事が無言のまま一步前に出る。それを遮る形で館における最高権力者が片手を軽く翳し、少年より半世紀ほどは多く年を重ねたであろう老執事の動きを止めた。

「売春婦は男に性の快楽を与えることが仕事だけれど、僕はそんなサービスを得るために君たち姉妹を買ったわけじゃない」

雪奈より年齢が低く、性風俗に関する知識など無さそうな風貌なのに、特に恥じらう様子も無く、諫めるように章史は反論する。

「……それじゃ、何のために私とお姉ちゃんを金で買ったのよ」

避妊薬を飲ませ、二人にセックスの下準備をさせておきながら、この少年は一体何をさせようというのか——。

「君たちはね、教材なんだよ」

子供独特の柔らかな微笑みを湛えたまま、章史の口から雪奈の想像を遥かに超えた言葉が紡ぎ出される。

「僕の調教者としてのテクニックを実証させるための、大切な教材なんだ」

セックスの教材——その言葉の意味する所を何度咀嚼しても、章史が何を意図しているのか琴美にはスマートに解釈できない。

「高苑寺の男は精通と同時に性教育が行われるんだ。一年半前に精通した僕は、それから性戯を錬磨するため、セックスに長けた女を何度も何人も宛がわれたんだよ」

「彼女達は、さつき雪奈が言った売春婦だね」と、少年は自らの性遍歴を一抹の恥じらいすら露わにすることなく明かした。思春期真っ盛りなこともあり、目の前の少年が紡ぐ淫らな述懐が耐えられなくなったのだろう。

妹は迫り上がってきた頬の熱に負けたらしく、少年を見据えていた視線を泳がせた。「娼婦達が言うには、僕は随分とセックスの上達が早かったらしくてね。ちょっと前に『もう教えることは無い』——って、言われちゃったんだ」

章史の話し方は、幼いながらもとても洗練されている。話がつつかえることもなければ、右に左にと逸れることもない。外見は小学生なのに、話術は半端な講師よりもよりも巧みでわかりやすかった。

「実際、最近僕に抱かれる娼婦は、僕をイカせるまで何度も気絶ながらいきっぱなし

になっちゃうんだ。途中で『もう止めて』って泣き出す女もいたからね」

それなのに、話の内容を一つ理解するたびに、琴美の脳裏には混沌の嵐が吹き荒れ、盤石とした理性を掻き乱す。

（本当の話……なの……）

少年はどう見ても琴美より——否、妹の雪奈よりも年下だ。十九歳の琴美と比べれば、最低でも七、八歳以上は年齢差があるだろう。

こんな年齢では、セックスに対する知識が何一つ無くてもおかしくない——にもかかわらず、この少年は牡として既に成熟しているのだ。

（私の胸くらいまでしか背丈が無くて、体付きも女の子みたいに細いの……）

章史の台詞は誇張で糊塗されているわけでもなければ、過度の謙遜をしているわけでもない。泰然自若とした少年は、淡々と事実だけを姉妹達に述べていると、琴美の中で培わされてきた人生経験が告げていた。

「ただ、僕は非処女を墮としたことはあるけれど、処女には快楽を教え込んだことは一度も無いんだ。だから——」

足音を深い絨毯に吸い取らせながら、章史が雪奈と琴美の間に割ってはいいる。

「あっ——」

「琴美や雪奈みたいな処女を、一から僕を満足させる女に調教してみたいんだ」
章史の両手が、姉妹の下腹部に沿ってずりりと降ろされる。融資取引が締結する前、身体検査を通じて処女かどうかの確認を念入りにされた理由がようやく判明した。

(たしかに、私達は娼婦じゃない……)

琴美達姉妹は、章史に性的奉仕をする必要は一切ない。客に性のサービスを施して金銭を拝受する業種の類とは一線を画する。

セックスの教材——章史が姉妹をこう称した真意を、琴美はようやく把握した。

(私達は……女の形をした道具なのね)

個人の意思など必要なく、ただ章史が満足な結果を出すまで開発され続ける、生きた試金石——。

琴美にとって、それは娼婦として扱われるよりも遥かに辛く、悲しいものだった。

(やっぱり、コイツは最っ低だ)

ミニスカートの上から無遠慮に秘部をまさぐる小さな手を睨み付け、雪奈は改めて目の前に居る少年が外道の権化だと思い知る。自分達姉妹は娼婦として買われたわけ

ではない。けれど、それと同等の——いや、それ以上の屈辱に遭わせてやると告げられた。

(こんな最低な奴の玩具に……)

握り締めた掌に爪が食い込み、瞋恚に燃やされた心臓が燃え盛る血脈を全身に巡らす。叶うなら、全力でこの幼い悪魔を殴り倒してやりたい。足蹴にし、声が枯れ果てるまで罵倒し尽くしてやりたかった。

(それなのに……あっ——)

ぶちのめしたいほど憎たらしい相手なのに、章史の触れられた股間からは歯痒いような甘い痺れが生じている。少年の小さく柔らかな指が雪奈の未熟な秘所をなめらかに動き回り、何重もの布地に奥に隠れた牝の口を弄くり回す。その度ごとに、下腹部から艶やかな衝動がじわじわと湧き上がり、怒りに満ちた動悸を侵蝕していく。

(コイツ……本当に私より年下なの?)

雪奈が女として極一般的なオナニーに着手したのは、中学に入る直前だ。急激に自分の身体が女性らしい丸みを帯びていくに従い、雪奈は自らを指で慰める回数を増やしていく。

けれど、達した回数は数えられるほど少なく。中途半端なオナニーで終わるのが殆

どだ。絶頂へいたる歩みは鈍足であり、一時間かけて丹念に秘唇を愛撫しても、満足な結果が得られないのはざらだった。

自分は、ひよっとしたら不感症というヤツではないのか——遅々とした性感しか得られないので、そう懸念したことだってある。

(なのにな…何なのよっ)

娼婦が許しを請うまで絶頂し続けたという少年の弁は、大言壮語の法螺だと思った。雪奈の性器に章史が——初めて男性が触れた瞬間、全身に忌避の悪寒が走ったのだ。淫乱な娼婦はとにかく、私は絶対にこんな年下の男にエッチで屈しない——そう、確信したにも関わらず、数分と経たずして股間には快樂の露が溢れてきている。

(オナニーだってあんまり感じないのに……どうして……っ)

しかも、章史はスカートの上から雪奈の股座をまさぐっているだけだ。女の蜜溝へ直に触れてもいないのに、雪奈の手淫とは比べものにならない隔絶したテクニクによって、女の下に眠る性欲を暴き出してくる。

(ああ…お姉ちゃんも同じだ……)

雪奈と同じように、ワンピースの上から股間を愛撫されるたびに、琴美の柳眉が艶めかしげに歪む。今まで見たことも無い、性感によって色を帯びていく麗しい姉を見

ているだけで、雪奈の動悸が熱く昂ぶる。

この少年は、女を——姉妹を喰う下拵えをしていると、雪奈の本能が囁いた。

「——以上が、貴女方の大まかな待遇となっております。不明瞭な点があればお答えいたします」

先程から老執事が館におけるルールを説明していたようだが、今の雪奈にはそんなものはどうでもよい。少しでも自分の身体に集中して叱咤しなければ、快樂が激増してしまう。

(やば…このままじゃ……)

ふとももが細かく痙攣してきている。荒くなってきた声を章史に拾われるのは時間の問題だ。

姉妹からの質疑が無いことを確認すると、執事は計器をあてたように腰を折り、踵を返して老人とは思えない優雅な足取りで退室していく。

「さて——と。それじゃ、契約通り、これから二人を犯すけれど……うん」

章史の手がピタリと止まり、雪奈と琴美を交互に見比べる。少年は初めにレイプする女はどちらからにしようかと、無邪気な双眸で選定していた。

(ちよっと待ってよ……今は——)

自分の処女が喪失するのは事前に通知されている。

洋館に足を踏み入れた後、最初にバスルームに連れられて身体を清められた際、今夜を境に自分は無理矢理破瓜を迎えさせられるのだと覚悟していた。

(でも、今の私は……)

濡れている——処女膜の隙間から、発情した女の蜜がとろりと流れ落ちているのが感じられる。

(大っ嫌いなヤツの手で、快感を与えられるなんて……)

そんな事実を、絶対に章史には知られたくなかった。

(嘘っ、ヤダ、待ってっ)

だが、雪奈の切望を一笑に附すかのように、幼い少年と視線が交差する。姉の股座を愛撫していた指が停止し、興味を失ったかのように引き抜かれた。

反対に、雪奈の縦筋には小さな指が布越しに絡み付き、まるで処女の興奮を見透かしたようになだらかな愛撫へと変わる。

「それじゃ、雪奈から犯してあげようかな」

まるで死刑宣告に等しい言葉が紡がれた直後「待ってください」と別の声が割り込む。それが、いつも聞き慣れている姉の声であると気付くのに、鼓動が破裂寸前だっ

た雪奈には随分と時間がかかった。

「章史様。妹から——雪奈からではなく……私から抱いて頂けませんか」

見た目からして清楚で控えめな琴美からの提案が予想外だったのか、章史が興味深げに振り返る。

「うん？ 何か理由があるの？」

雪奈の股間に吸い付いていた小さな指が、ぴたりと動きを止めた。

「はい。その……えっと、お恥ずかしい話なのですが……」

琴美は言葉尻を濁らせ、自らの股間を覆い隠すようにそっと両手を重ね合わせた。透き通るような繊指の下で、スカート越しに内腿が擦り合われているのが伺える。

その仕草は妹である雪奈が唾を呑むほどに艶めかしく、いじらしい光景だった。

(お姉ちゃん……う、嘘でしょ……)

あのしおらしい琴美が、まるでピッチの如く肉の享樂を求めようとしている。雪奈が愕然とするのを余所に、パッと章史の顔が明るく弾けた。

「そんなに気持ち良くなっていたんだ。もう我慢するのが辛いんだね」

「は、い……ですから、その……」

「うんっ、やっぱり琴美から犯してあげる」

羞恥に顔を染める姉が俯くと、章史は満面の笑みを浮かべて喜ぶ。一体、何がそんなに嬉しいのかと、木訥な疑問が雪奈の脳裏を過ぎる。

（あ、そうか。コイツ、私達で自分のエッチなテクニクを反映させたいから……）
姉妹が章史に買われた基本的な動機を思い出す。男性経験の無い琴美が、早くも自分の愛撫に反応してくれたことに少年は高揚しているのだろう。

「雪奈はまた後でね。ついてきて、琴美」

幼い権力者が扉に駆け寄り背を向けた矢先、琴美が雪奈の手に何かを握らせた。

「——えっ？」

耳元に琴美の唇が寄せられ、小さな囁きが雪奈の耳朶を震わせる。臆気な響きに含まれた意図を問い尋ねようとするが、既に琴美は章史の後を追っていた。大きな扉が音もなく閉じた後には、雪奈だけが室内に残される。

「……お姉ちゃん」

雪奈の掌には、姉のハンカチが握らされていた。

（私のこと……わかってたんだ）

章史の愛撫によって濡れてしまったこと。

それが雪奈にとって認め難い事態であったということ。

絶対に自分の痴態を章史に気取られたくなかったこと——。

（全部わかってたから、私の代わりになつたんだ……）

琴美は優しすぎる——だからこそ、絶対に付いていきたかった。それなのに、雪奈は琴美の足ばかりを引っ張っている。威勢だけは良くて、肝心の部分で姉の手を患わせる情けなさに涙腺が緩んだ。

（強くならなきゃ……強く、ならなきゃ……）

声なき涙が頬を濡らす。

股間から糸引く淡い淫蜜を拭うため、雪奈はそつとスカートをたくし上げた。

まるで御伽噺の中に出てくる、贅の限りを尽くした寝所だった。

クイーンサイズを遥かに上回る、天蓋付きの豪華なベッドが中央に鎮座した部屋。室内には大きな姿見が一つあるだけで余分な調度品は一切ない。まさに、身体を横にするだけの部屋だ。

（こんなに大きい寝室なんて……）

勉強、読書、着替え、睡眠等を、すべて同じ個室で行う一般的な家庭に育った琴美

には、この無為なまでの広さは落ち着かない。仰向けに倒れた身体が、外観に見合った優れたスプリングによって受け止められている。リボンによって整えられていたヘアスタイルが解け、ベッドシートに艶やかな黒髪が散逸した。

（私……処女を散らされるのね）

これは、逃れられない現実だ。それなのに、どうにも現実感が希薄だった。

理由の一つとして挙げられるのは、章史があまりにも幼いことだろう。寝所に移動する最中にどうしても気になったので章史の年齢を尋ねてみたところ、幼い少年はまだ十一歳だとわかった。

（雪奈よりもずっと年下の男の子が、初めての相手……）

小学生に直せば五、六年生であろう男の子だ。もともと、章史は幼いながら落ち着いた物腰であり、年齢不相応に大人びてもいる。

「琴美の服、ふわっとして可愛らしいね」

優しく寝台に押し倒してきた幼い少年が、仰向けになった琴美の上から少女趣味が織り込まれたファッションを褒めてくれた。

「ありがとうございます……ございます」

他に述べるべき言葉が見つからず、琴美は少し視線を逸らして身体を振る。

白いシフォンのワンピースが広がり、女体のラインが浮き上がった。スカートの裾が部分的に捲れ上がり、フレンチベージュのパンティストッキングに覆われたふとももが剥き出しとなる。室内はとても暖かいが、指や足の先は冷えて血の巡りが良くないのか、まだ少し寒さを感じた。

（年下の男の子に、服を褒めて貰うなんて……）

決して嫌な気持ちではないが、自分よりも遥かに小さな少年から贈られる言葉に、何やら違和感を覚えてしまう。年齢は琴美の方が上なのに、年下の章史に可愛がられているように感じた。

「琴美、怖い？」

女の四肢が緊張に苛まれているのを見て取ったのか。人を落ち着かせる穏やかな微笑みを浮かべ、章史がそっと琴美の頬を触れる。少し冷たいが、とても柔らかい少年の指が女の肌に沈んだ。

「はい……怖い、です」

これから処女を喪う際、怖くもなんとも思わない女もいるだろう。ただし、それは例外なく愛する男に操を捧げ、心の底から思い人を信頼している女だけだ。

家族の崩壊を防ぐため、琴美は自ら進んで身を捧げた。

自分を育ててくれた両親を——そして今となつては詮無きことだが、可愛い妹に悲惨な未来を歩ませたくは無かった。

処女を奪われるのも、ある程度は感情の整理がついている。

しかし、契約による合意がなされているとはいえ、初めての性行為で実質強姦される琴美に、恐怖が湧かないわけがない。

「女は純潔を喪う時、とつても痛いつて聞くからね。でも、大丈夫だよ。琴美が痛くならないように、僕がしっかりと快樂で麻酔してあげるからね」

幼くあどけない少年の淫靡な宣言が、琴美の複雑な心境に一層の拍車をかける。

(これから……この子に犯されて、純潔を奪われるはずなのに……)

行為としてはレイプと変わらない——それなのに、無理矢理力尽くで操を奪われるという実感が殆ど生じない。

(幼い顔……柔らかな声……それに——)

強姦に必ず伴うはずであろう、牡の悪意というものが章史には含まれていない。

その所為なのだろう。憎悪を隠そうともしない雪奈と異なり、琴美はどうしてもこの可愛らしい容貌をした少年に激しい嫌悪を抱けなかった

「あ……ん……っ」

そつと、ワンピースに少年の小さな指が載せられる。スカート。パンティストッキング。ショーツ——三種もの布地を介しているのにもかかわらず、章史の指は女の股間に引かれた肉溝を正確になぞってくる。

「ふふ、気持ち良い？」

「え、と……はい」

少しだけ逡巡するものの、琴美は泡のように生じた感覚を肯定し、小さく頷く。

娼婦を悦楽に泣かせたと言っただけあって、章史の愛撫は信じられないくらい巧みだ。

琴美も一週間に一度ほどの割合で自慰に耽るが、短時間でここまで快樂を得られた経験は一度も無い。

(私よりも小さくて細い指なのに……)

力強いわけではなく、かといって弱々しいわけでもないのに、章史の未成熟な指先はあまりにも的確に琴美の快樂を湧出させてくる。

まるで、女体の中に仕込まれた快感のスポットが、この少年には見えているのではないかと疑うほど、その指使いには迷いが無い。

(指紋が、地肌に吸い付いているみたい……)

温かみを帯びてきた少年の指は、一度も停止することなくなめらかに滑る。それで

いて、敏感な箇所を触れるとじつくりと這わせるように肌理を弄んだ。閉じられた肉の華が柔らかに擦られ、湿った温もりが染み出してくる。

「あ……」

脚線を覆い隠していたワンピースの裾を、手透きとなっていた少年の片腕が捲りあげていく。

(こんなやり方でスカートを捲っていくなんて……)

琴美は女の子らしさを象徴するスカートが好きだ。小さい頃から身につけていたからこそ、この衣服の特性を熟知している。線維の性質や編み方、形状の違いによって、布地を引き上げる方法は大きく異なると経験則でわかっていた。

だからこそ、なのだろう。半ば無意識に、指の動きが機能的な軌跡に固着してしまっている。

(ああ、なんて淫らなの……)

一方、章史のやり方は、不合理の塊とも言うべき手付きだ。ゆったりとした動きで白い膝を撫で上げ、ナイロンの光沢が塗布されたふとももに指紋を塗すだけ。本来なら一番捲るのに重要な指先は、布地に触れようとしてもしない。

脚線が露わになっていくのは、脚を撫で上げる際にスカートが手首へ引っかかって

いるため——いわばついだった。

(こんな方法で脱がすなんて……)

衣服を剥ぎ取るのを目的とするのではなく、女体をまさぐる上で自然に衣服がはだけさせられていく。

(私……男の子に……裸にされようとしている……)

女の身体を包み、着飾り、そして守る布がほつれていく。

隠されていた女の肌が灯によって浮かび上がると、羞恥の火が頬を炙った。

「琴美の脚って、柔らかくてあつたかいね」

「えっ……あんっ」

ふとももの付け根までが露出した辺りで、腿肉の内側にすると少年の掌が滑り落とされる。今までのじつくりとした動きではない。急激に肌への摩擦が増え、快美の湧出が勢いづく。

シユル——フレンチベージュの化繊がくすぐったい音を奏で、艶やかな光沢を反射させる。脚を包んだナイロンのスキンが、少年が落としていく淫蕩な痺れを脚全体に走らせた。

「あっ……んっ……ダメ、です……っ」

触られた場所が場所だ。反射的に脚が内側に閉じてしまう。

(柔らかい手の感触……)

強く内股を閉ざすと、章史の掌がふとももの稜線を湾曲させる。男らしさを連想させるゴツゴツとしたものではなく、少女のように可愛らしく小さな手が琴美の内腿に挟まっている。

(やだ……私ったら……)

腿肉で悪戯をしてくる手を挟むことで、肌理を伝うこそばゆい感覚は減衰した。けれど、これではまるで琴美自身が少年を求めているようにしか見えない。

「え、と……その……」

脚の力を緩めるべきか。それとも、これより上に遡らせないために、このまま押さえておくべきか。どちらを選択すべきか十九歳の女は迷う。

「手、動かなくなっちゃったね」

「あ、その……」

琴美は章史に買われた身だ。拒む権利も躊躇する権利も与えられていない。よしんばこの淫行を押し退けても、この幼い権力者が命令を下せば、従う術しか残されていないのだ。それなのに、章史は眉を顰めることも無ければ琴美の我が侘を咎めること

も無く、くすりと柔和に微笑む。

「それじゃ、こつちを触ろうかな」

「あ……んっ」

不意に、ブラに保護された豊かな胸部に甘い痺れが走る。意識が内腿に引き寄せられていたため、一呼吸おいてようやく自分の胸を章史が撫でているとわかった。

「わあ、大きいおっぱいだね」

率直な感想を口にしつつ、章史は丸い膨らみを覆い隠したワンピースの襟元にそっ指を置く。打ち合わせを結び合わせていたリボンがすると解かれ、胸元に至る肌が露出していく。

(衣服を脱がすの……とても手慣れてる……)

両手を用いるまでもなく、章史は器用に片手のみでリボンを解いていく。その動作はとてもスムーズで、気付いた時にはレースアップされた胸元が大きく開いていた。

上半身は臍が見え始めるギリギリのラインまではだけさせられ、人目に付くはずのない女独自のインナーが露わになる。

「琴美のブラジャー、ワンピースとお揃いの白なんだ」

「んっ……は、い……」

指でデザインを確認したいのか、章史がカップの周縁をつうと撫でる。

(男の子にこんなところを……ブラを見られるなんて……)

頭が含羞による排熱でふらふらしてきた。

乳首は当然として、十九歳の琴美は今まで一度も異性にブラを見せたことは無い。ショーツならば不意の突風や地下鉄の通風口の真上を通った際、公衆の面前で赤裸々に曝したこともあるが、それらは例外なく偶発的な天災か人災だ。

けれど、ひらりと揺らめくスカートと異なり、アウトターに押さえ付けられ胸囲にぴたりと密着したブラは、何かの拍子に見せる可能性はほぼゼロに等しい。

それだけに、ブラを見られることは、ある意味ショーツを見られる以上の恥ずかしさがあった。

「琴美のブラはお洒落だね。花の模様、とても綺麗だよ」

自分より年下の——始めて下着姿を見せた少年に、インナーのセンスを褒められる。素直に受け取るべきか、謙遜するべきか、それとも黙しておくべきなのか。

そんな岐路で右往左往している間に、ピンツと音を立てフロントのホックが解けた。

「えっ——」

一瞬の出来事だった。それこそ、何が起こったのかすぐには把握できないほどに。

繊細なブラの布地に包まれた、白く柔らかな双丘が紡糸のカップから弾ける。

「きゃっ」

心の準備が整う前に、白い膨らみに載せられた桜色の先端がつんと天を衝く。

「琴美。ダメだよ」

本能的に両手が胸を覆おうとしようとするものの、章史の声が透明な鞭となつてぴしやりと琴美の腕を打ちつけた。普段から命令することに慣れているのだろう。少年の声は荒げられてはいないものの、他者の介入を一切許さない芯が通っていた。

(ああ……恥ずかしい……顔が燃えてしまっ……)

ゆっくりと呼吸に合わせて振幅する乳房の下では、心臓が破裂しそうなほど強い脈を打っている。鼓膜が心音に揺さぶられ、熱い脈拍が全身を駆け巡った。

「ふふ、いいおっぱいだね」

ほのかな温かみを含んだ吐息が、そっと胸の先端に吹きかけられた。人肌の温かさを含む柔らかな風が敏感な突起を撫る。

琴美は「んっ」と小さく悶え、腋を閉じて身を縮こまらせた。

「形も色も、今まで抱いた女の中で一番綺麗だよ。処女だからかな」

「やっ……あ……っ」

小さな舌が鶯色の乳首をべろりと舐める。ぬめりを帯びた肉の触手には無数の突起が含まれており、唾液と絡み合って絶妙な刺激を乳肉に走らせた。

「ふぁ……んっ」

生まれて初めて感じた鮮烈な愉悅に、声を抑えることができない。自慰に耽る際は、時に双丘を軽く揉み、紅を帯びた先端をそつと弄くるものだ。

撫でる。押す。擦る——そういった、女体に刻んできた経験則がまったく役に立たない。未知の快楽が淡い波濤となって十九歳の肢体を甘美にそよがせる。

(これが……男の人に舐められること……)

粘性を含んだ生温かい唾液を塗布され、肌ではなく粘膜で愛撫される初体験。成熟しかけの白い身体が性感に喘ぎ、免疫のない心が動悸に拍車をかける。

「ん……あっ、んっ……っ！」

何度か舐められ、反復する刺激に少しだけ身体が慣れたところで、今度は胸の頂が章史の口の中に吸い込まれる。小さな乳輪がすっぽりと口腔に収まり、ちゅうと音を立てて吸われた。

「く……ふ、ん……っ……あっ……だ、駄目……です……っ」

無駄だとはわかっているけれども、十一歳の少年に制止を求めてしまう。乳頭が内から向

かって引き延ばされる感覚に、女の喉は甘味の含まれた吐息を抑えきれない。

(舐めて……口に含まれるだけで……こんなに……)

自分の性感が侵蝕される錯覚。乳房が吸われるたびに甘美なる痺れが乳首から浸透し、過敏な先端が淫らに勃起していくのがわかる。章史の口元からちゅっちゅつと音が漏れるたびに、羞恥と混乱が桃色の濃霧となって女の理性に霧をかけた。

「琴美は雪奈と比べて静かで楚々としてるけど、本当はとても淫らなんだね」

「そんなこと……ありません……」

ふるふると隆起した乳首が少年に甘噛みされる。小さな皓歯によって肉苒から快楽が搾り出される中、琴美は何とか否定の言を紡ぎ出した。

「そう？ 本当に淫らじゃないって言い切れる？」

「は、い……私はそんな……ふぁ……っ」

突然、恥骨が蕩けるような心地よさが下腹部に噴き出した。

「それじゃ、これは何？」

頭を浮かせて視線を下げれば、章史の小さな手が股座にそつと被せられていた。

(いつの間に……私ったら……)

強張っていた脚が、気付かぬ内に融かされていた。もう一度章史の手を脚で挟んで

押さえ付けようとする。だが、少年の手が内腿と股座の間に生じた三角の空洞にしつかりと入り込んでいた。パンティストッキングに包まれた美脚が艶めかしい光沢を撒き散らし、脚肌が撫でられるだけで拒むことが出来ない。

（私が、こうなるとわかって……）

章史が琴美の我が侘を押し通させていた訳を、今になってようやく理解する。

琴美の脚の拘束をふやけさせる自信が——いや、女体を思いのまま快感に溶かすテクニクに、この少年は絶対の確信があったのだろう。

（こんな小さな男の子なのに……）

十一歳の少年に、十九歳の女体が弄ばれている。その淫らに洗練された手管に、ぞくりと琴美の肢体が戦慄した。

「んっ……そ、んな……は……う……」

股間にするりと張り付いた章史の手が波を立てる。中指がパンティストッキングのセンターシームをしつとりと撫で、繊維の束がショーツ越しに秘裂に潜り込んだ。

「琴美の股、じわってしてとつても温かいね。そんなに興奮しているんだ」

「ち、違います。私は……」

章史の中指が鉤状に折り曲げられ、女溝の入り口に突き立てられる。

グチュ——他人には一度も聞かせたことがない淫らな水音が、琴美の耳朶を打った。

はしたない獣の欲情が詰まった泡が弾け、膣内から発情の匂いが立ち上る。

「何が違うのかな。琴美のまんこは、こんなに濡れているのに」

「そ、それは……あ、っ……」

章史の指先がゆつくりと螺旋を描く。小さく柔らかな指が一回りすることに、女の腰が喘ぎ膺の回りに羞恥の汗が浮かび上がった。

「ふふ、はしたない汁が垂れてきてるね。見てごらん、琴美」

クロツチの吸いきれなくなつた卑水がショーツの外に染み出している。女の蜜花を愛撫していた少年の指が持ち上げられ、琴美の眼前で止まる。

（初めて自分以外の人に愛撫されたのに……信じられない……）

章史の指が開閉され、女の淫蜜が卑猥な糸を引き延ばす。自分のはしたなさを証明する淫事によって、頭から湯気が出そうだった。

「発情した牝の良い匂いがある。男を牡に変える、フェロモンが発散しているね」

指と指の間に架かった蜜糸に少年の鼻梁が寄せられ、すんすんと小鼻が鳴った。

「あ、章史……様」

匂いを十分に堪能し終えた少年が、指を穢した淫らな牝液を口に含んだ。まるで動

物の子供が自分の身体を毛繕いするように、丁寧に指を舐め取る。

(こんな小さな男の子に、愛液を……)

自らの痴態を晒す情けなさと、自分より遥かに年下の少年に獣の欲を口にされる恥辱によって、意識がぐらりと揺れる。

「こんなに濃い愛液を漏らしているのに、まだ違うって言えるのかな」

「は、い……：……：……：……：……：……」

今の自分のはしたないのは反論のしようがない。けれど、決して自分の身体が淫らな資質に富んでいるためではない。女を悦ばせる章史の手技が冠絶しているのだ。

(そう……：……：……：……：……：……：……)

男性経験が皆無な処女が、こんな恥知らずの痴態を曝すはずが無いに決まっている。

「……：……：……：……：……：……」

「うん？ 何？」

「その……：……：……：……：……：……：……：……：……：……」

自分が生来淫らなわけではない——その方便として、琴美は章史の性戯に仮託した。

「ふふ、そっか。僕のテクニクが上手だから、琴美はたくさん濡れているんだね」

本音と嘘が混同した吐露は、琴美をセックスの教材とする章史には至極満足のいく

回答であつたらしい。

(いえ……：……：……：……：……：……：……)

章史の自尊心を引き出すための、誘導だったのだろうか——。

「あ……：……：……」

その真偽を確かめる機会は永遠に失われた。ショーツの中心線を撫でていた少年の手がざわめき、鼠径に沿って女体を遡行していく。

胸に触れていた小さな手も緩やかに下降し、臍のすぐ側を覆い囲むパンティストッキングのウエストテープにかけられる。二つの小さな親指がナイロン生地の下に潜り、追従して人差し指と中指が琴美の地肌を滑り込んできた。

「腰を浮かせて」

「は、い……：……」

章史が何をしたいのかはすぐにはわかった。琴美は少し腕に力を込め、ベッドシートから臀部を浮かせる。過去にコルガールを何度も裸に剥いたからだろう。女の肌理を隙間無く覆うフレンチユベージュの化繊を、少年はスムーズな動きで脱がしていく。

腰から臀部まで先にずり下げ、ふとももの付け根で一度手を止められた。次に下腹部に残っていた前面部を降ろし、股下までパンストが脱がされる。

(脚を寄せた方が良いのかしら……)

このまま章史が爪先まで体を移動させて脱がすのを待つべきか。それとも膝を曲げ、自律的な脱衣を働きかけた方が良いのだろうか――。

琴美の逡巡をよそに、章史はナイロン化繊から指を外す。小さな指が先と同じ要領でするりと純白のショーツをずり下げ、臀部になめらかなシーツの感触が伝った。

ニチャ――女の秘裂を覆い隠していた薄布が、粘った水音と共に分離していく。

(ああ……私、なんてはしたないの……)

ショーツと秘処の間には、何本もの卑蜜が糸を引いていた。

自分をこんな状態にしたのは章史だ――そう、思い込んだところで何の意味もない、淫佚なる光景。身体の芯から女の本能が涎を垂らしている。目を背けたくなる淫奔な現実が目眩を生じさせ、羞恥の熾火が女体を火照らせた。

自らの女性器を直に男性の視線に晒すのもさることながら、肉の秘花から止めどなく淫らな蜜を垂らす様を直視できない。

ただ裸を見せるだけなら女の美として言い逃れもできるが、今の琴美は女の媚を振りまいている。何より未通の乙女心は、秘部の紊乱により羞恥心を一層激しく燃え上がらせていた。

「琴美は男をそらせるいい女だね。僕のちんぼも興奮してきたよ」

その言葉に偽りは無いのだろう。章史は嬉しそうに立ち上がり、ベルトのバックルを緩める。ベッドの端へショーツパンツを投げ、前開きの付いた男性下着を勢いよく少年が脱ぎ捨てた所で、琴美の双眸が硬直した。

(嘘……そんな……)

眼窩に映る卑肉の立像がきちんと捉えられず、琴美は二度三度と目を瞬かせる。

「うん？ どうしたの琴美」

琴美の表情の著しい変化に気付いたのでろう。章史が声をかけてきたが、今の琴美は、仮に耳元で管楽器を吹き鳴らされても微動だにしなかつただろう。

未だ男を知らない女子大生の視線は、十一歳の少年の股間から生える信じがたい生殖棒に釘付けとなっていた。

(ペニス……大きすぎる……)

琴美はセックスの経験も無ければ、男性の性器を直に見たこともない。それでも教養として、体躯に見合った男根の大きさは知っている。

(10センチ……いえ、違う。もっと……もっと大きい)

章史の股間から隆起する卑棒は、明らかに身の丈に合っていない。薄明かりの照明

に紛れて輪郭が判然としないが、どう見ても15センチを越えていた。

その異形の精棒は長さに見合うだけの太さを有しており、肉茎の円周は琴美が指で作れる円よりも大きい。

(確か……亀頭——だったかしら)

臍気に思い出された肉の冠は兜の如くずっしりと広がり、さながら傘を連想させた。先端を除いた肉樹には、無数の血管が張り巡らされ、ドクドクと音が聞こえそうな強さで少年の獣欲を滾らせている。

琴美が硬直している間に脱いでいたのか。章史の着ていた品の良いシャツはショーツパントの上に被せられ、少年の裸体が淡い灯りの満ちた室内に露わとなる。

(ほっそりとした体付き……まるで女の子みたい)

全裸となった章史の体には男性独特の角張った印象が無い。中性的で柔らかな体付きは、年齢的に男女の性差が完全に分化していないことを示している。

(それなのにペニスだけが男の……いえ、大人のモノだなんて……)

章史の肉刃が反り返る。若さの滲み出た強烈な勃起によって、亀頭冠と下腹部がぴたりと張り付いていた。

無垢な子供の体を持ちながら、性器には獣の凶暴性を宿している——そのアンバラ

ンスながらも一種の完璧さを持つ少年の裸に、十九歳の女は瞳を奪われる。

「あれ？ 琴美、僕のちんぼを見ているの？」

「い、いえっ……その……」

章史に語りかけられ、女はようやく我を取り戻す。即座に少年の指摘を否定しようとして試みた琴美だが、すぐに空虚な行為だと覚った。これだけ男性の股間を凝視していて、今更言い訳したところで何の意味も無い。

「別に良いよ。僕のちんぼは女をよがらすため、小さい頃からトレーニングが施されているから、ちよつと普通と違うらしいんだ。ほら、とっても大きくて立派でしょ」

いきり立った怒張に少年が手を添えるが、巨根と称しても差し支えない生殖棒はともて子供の掌では覆えない。臍を隠してしまう長さとも黒ずんだ鋼を思わせる偉容は、その凶悪さをより鮮烈に女の臉に焼きつける。

「今まで抱いた女も、最初は琴美と同じように驚くんだ。ふふふ」

それがちよつとした自慢でもあるのだろうか。章史は、薄い胸を張って僅かに背を逸らす。

「だから、ね」

幼き主がシーツの上に膝を立て、琴美に覆い被さる。ベッドが僅かに揺れた。

「あっ……」

「僕のちんぽに貫かれた女は、みんなとっても気持ち良さそうに喘いでいたよ」
クチュ——亀頭に開いた小さな口が、琴美の秘口と浅いキスをする。

これから琴美の純潔を散らす——そう、巨大な卑肉が嗤っていた。

(まだ、服を着ているのに……)

上と下の局部は露出しているものの、琴美の服は脱がせられる途中ではだけたままだ。てっきり全裸にされて犯されると思っただけに当惑を隠せない。

スカートがたくし上げられ、パンティストッキングとショーツを着けたまま抱かれるなど、それこそレイプと変わりがないだろう。

「身体を少し曲げるよ」

章史の腕が琴美の膝を抱える。そのままふくらはぎに少年の手が降り、女体が仰向けのままゆっくりとくの字に曲げられた。

屈曲位——脚全体が裏返され、反った臀部に引つ張られて女の蜜口も上を向く。

(こんな……性器が剥き出しにされる格好にされるなんて……)

章史の指が少しだけ戻り、両膝の窪みを抑える形で琴美の両脚がM字に開いた。

少年の体重がのし掛かる状態となっているので、押さえ付けられた脚は容易に戻せ

ない。

(私はこの男の子に……処女を奪われる……)

初めてのセックスは、優しく抱きしめられたかった。

まだ見ぬ思い人には、自分から進んで操を捧げたかった。

睦言を交わしながら、深い愛を語らいたかった。

(全部……叶っていない初夜なのに……)

章史の双眸を覗き込む。十一歳の男の子は、紛れも無い強姦者だ。

それなのに、邪気の無い少年の無垢な瞳はとても綺麗だった。

(私は……どうすれば良いの)

妹とは異なり、この幼い性獣に好意も嫌悪も抱くことができず、それ故に十九歳の心は迷走する。

「あっ……く、んっ……っ！」

そんな琴美の悩みを斬り捨てる、鋭い痛みが下腹部に走る。初体験は苦しみを伴う

——そんなわかりきった事実が実感に変わるまで、一拍ほどの時間を要した。

(処女膜が、延ばされて……)

十九年間に渡り琴美の純潔を印していた血の膜——。

処女の証たる肉の隘路が、少年の肉槍によって引き裂かれていく。章史の腰がほんの僅かに沈み込んだ。女体が内に向かって緊縮し、下腹部が半ば本能的に引き締まる。「ふうん、これが処女膜なんだ。膜って言うくらいだからもつと柔らかいと思っていなければ、ちよつと硬いね」

好奇心が前に出た感想を章史が吐露するものの、苦悶に支配された女の耳に届かない。灼熱感を伴う痛みは、琴美から悲鳴すらも奪っていた。

「でも、この硬さが純潔を守っているって感じがするね。ふふ、僕のちんぼで突き破っておまんこを穢すんだって思うと、ちよつとわくわくするよ」

獣の情炎によって熱せられた肉棒が嵌入され、牝の一角が牝の袋を灼いていく。章史の体重が腰の中心に収斂し、純潔の血膜を強引に引き裂いた。

「んっ……ああっ……！」

性器の先端が潜り込んだ所で、プツンと何かが千切れるような感触が女の体内に弾ける。刹那の間をおき、章史の剛棒が一気に根本まで膣内に潜り込んだ。

(膣中に……挿って……)

極大の苦痛が琴美の呼吸を停止させる。上質なベッドシートが震える掌の中で握り締められ、生理反応で反り返った背が寝台から浮かび上がった。

腹部が内に向かって引き締まる。喘ぐように臍の溝が収縮した。女としての丸みを帯びた背がじわりと脂汗に濡れ、痛みによって握り込まれた足指がふるふると震える。緊張と痛みによって蝕まれた琴美の頬に、ふと柔らかな温もりが伝わった。

「これで、琴美は僕のモノになったよ」

章史が小さな掌を広げ、琴美の片頬を撫でている。女の脚を押さえ付けていた少年の腕が下降し、細い指が柔らかなふとももをそつと抱く。割れた膝の間から章史が顔を覗かせ、飾り気の無い透き通った微笑みを投げかけていた。

「はあ……はあ……私が……章史様の……」

荒い呼吸を繰り返して、傷物になった女は少年が紡いだ宣言を反芻する。自分から愛を捧げると誓った相手に同じことを言われたら、どれだけの幸せを感じられただろう。自分の純潔を愛する男に捧げたなら、どれだけの喜びを感じられただろう。

(けど……私は、この男の子に犯されて……穢された……)

琴美は雪奈みたいに章史を憎めない。しかし、たった今刻み付けられたレイプの記憶は乙女の心を無慈悲に引き裂く。破瓜の痛みではなく、心の痛みに耐えきれなかった身体が、目尻から一筋の涙を伝わせる。

「あれだけ濡らしたけれど、やっぱり最初は痛いんだね。ごめんね、琴美」

溢れ出した雫を、章史がそつと指先で拭い取る。琴美の身体を手玉に取り、未開發の女体を快感に酔わせていた少年は、幼くして紳士の優しさを持ち合わせていた。
(この子は……章史様は、本当に私の身体をいたわってくれている)

少年にとつて琴美は生きた教材だ。

だからこそ、なのか。破瓜を迎えた女を本気で大事にする心根が垣間見えた。

(でも、違う……違うんです)

琴美の求める優しさと、章史から向けられる優しさは完全に舐先を違えている。

悪意の介在しない少年の配慮。それ故に、純潔を喪った女の悲しみは深い。

「琴美。セックス、続けられそう？」

大人になった女子大生は込み上げる涙を絞り切る。下腹部から広がる熱い痛みに堪え、少年の頬へそつと掌を添えた。

「章史様……私を、心地よくしてください……」

自分に課せられた役目は果たさなくてはならない。混沌とした本心を、契約による強力な義務感によつて押さえ付ける。

「その……大きな……お、おちんちんで……」

元来は男の愛を注ぐ精棒で、無垢な女体を開拓して欲しいと願い出る。男性器を俗

語で口にすること自体、琴美は初めての経験だった。

(卑猥な言葉を自分から紡ぐなんて……)

これは自分の本心ではない。そんなことは琴美自身が誰よりもわかっている。

それでも、己から男の性器を求めてしまった。これは、糊塗し得ない恥辱の記憶として魂に刻まれるだろう。

「身体、大丈夫なの？」

「はい……平気、ですから……」

無論、嘘だ。身体の内側から強引に切り開かれるおぞましい痛みは、見えない針となつて間断なく女体の神経に突き刺さる。一方で、自分の肉体から吐き出される激しい痛みは、混濁とした迷妄から目を背けさせてくれる。

(身体よりも……心がぐちゃぐちゃになつている方がずっと辛い……)

バラバラになつた自分の心が互いに争う——そんな胸中の内紛が継続するのならば、激しい肉の痛みに晒された方がよほど楽だった。

「章史様のお好きなように……立派なおちんちんで突いてください……ん……っ」

章史の頬から両手を離し、シーツに掌を押しつける。その動きが見届けられた後、少年の腰が僅かに引き抜かれた。破られて間もない狭隘な肉路が、子供が持つべきで

はない精悍な肉棒によって抉られる。

「いっ……うう……っ」

膣の中を無遠慮に駆け巡る灼熱感に触発され、押し殺した苦悶が漏れ出る。シートに立てられていた指が掌に丸め込まれ、寝台に放射線状の皺が刻まれた。

「わあ、これが処女の味なんだ。うん、瑞々しくて美味しい」

感嘆の吐息と共に、章史の目が綺羅と輝く。穢れない女を初めて喰う経験に、非童貞の少年は新鮮な膣内の感触を堪能していた。

(純粹で……嬉しそうな顔……)

琴美を犯す章史の顔は、曇りの無い喜びに満ちている。年上の女を強姦しているようにはとても見えない、晴れやかな表情。

(十一歳の男の子の性器が……私のお腹の中に……)

子供らしい天真爛漫な笑顔を描きつつ、章史は小さな腰を緩やかに前後させ始める。空洞を穿たれたばかりの膣路に、肉の刃を抜き差しされる感覚が意識を席卷した。閉じ合わされていた肉壁をこじ開けられ、貫通の痛みが琴美の四肢を痙攣させる。

何より強烈なのは下腹部から生じる異物感だ。牡の象徴である男根が、女の股座に穿たれた穴を押し広げながら侵入している。粗暴な力によって、女体が内側から延ば

される本能的な忌避感と、痛みよりも遥かに鮮烈な嵌入感が琴美を浚う。

(お腹の中がミチミチツツて……いっばいになって……)

女を中心には、男を迎え入れる為の穴がある——そんな当たり前の事実を、十九歳にして初めて琴美は思い知らされていた。

「琴美のまんこ、凄く締め付けだね。僕のちんぼが、ギュウツツて食べられてる」

蕩けるような甘い声で章史が悦楽の声を零す。少年の口からとろりと粘りを孕んだ吐息が漏れていることから、琴美の痛みと相反した快楽を貪っていることが窺えた。

「ふっ、ぐ……うっ」

快楽を享受できる章史とは対照的に、琴美の歯列が辛苦に結ばれる。

(おまんこの中に、大きなおちんちんがズブツツて刺さって……)

振り返った肉の蛮刀が、女の媚肉を容赦なく切り捨てていく。琴美の純潔が無残に裂かれ、少女の名残が犯し尽くされていった。

(私……汚れていく……穢されていってる……)

年端も無い少年が牝の初物を貪る恍惚に浸る中、成熟しかけの女は牡に凌辱される惨禍に叩き込まれていた。

曲がりなりに恩人にあたる少年を、琴美は恨めない。けれど、操を奪われた事実

を直視させられ、愛の幻想を塗り潰された女は胸中で涙を流す。

「処女まんこの中、まだ硬いけれど味わいが深いね」

タンツ……タンツ……—。

徐々に高まる性感に触発されたのだろう。章史のストロークも自然と速度を増していた。少年の小さな身体がまもなく成熟する女のふとももを叩き、リズムカルな音を奏で出す。

(いやらしい音が……)

男と女の股座が重ね合わされ、柔らかく打ち付けられる。蜜口から掻き出される愛液が無数の糸を織り、淫靡な情景を編み込んでいく。しんと鎮まった室内にたった一つだけ響き渡る交合音が、男女の肉体を楽器に変え淫らなデュオを奏でていた。

「琴美のまんこは名器の素質があるね。僕のちんぽに吸い付いて離してくれないよ」

「あっ、んっ……そ、んな……ちがいがい、ます……んんっ」

「ふふ、そうかな。琴美の処女穴、こないやらしい涎をベトベト溢しているのに」
自分には淫乱の気がある——そう、暗に評されて琴美は口を噤む。

破瓜の痛みと腹部の押し上げられる途方も無い嵌入感が、意識を席卷していた。

(それなのに……私の身体は……)

乳房の先端は赤味を増し、ツンと天へ向いている。

蜜口からは確かめるまでもなく大量の愛液が湧き出していた。

破瓜の痛みと苦しみが大き過ぎるので感じないが、これらが無ければあるいは——。

(おまんこの中……男の子のおちんちんでグチュグチュにされて……私は——)

あるいは快感に喘ぎ、悦楽に悶えて啼いているのではないか——そんな、恐ろしい予感が十九歳の背筋をよぎる。

「まんこもそうだけれど、琴美の身体はとつてもいやらしいね。服を着ている時は凄く細く見えたのに、おっぱいもお尻も凄く大きい」

「やっ、あっ……あ、章史様……んっ……言わないでください……」

体付きを指摘されると、交接の痛みを押し退けて悲鳴じみた声が喉を震わせる。

(やっぱり……私の身体、ふしだらなのね)

章史としては性の魅力溢れる女だと褒めたのだろうが、その言葉は琴美を憂鬱に沈ませるだけだ。

小さい頃から発育の良かった琴美は、その幽艶な容姿によって人一倍好奇の視線を集めてきた。雪奈のように活発な気性を備えていたら、他者からの注目は自尊心の発育に繋がられたのかもしれない。しかし、小さい頃は極度の内気だった琴美にとって、

他人に自分の身体を見られるのは苦痛でしかなかった。

小学校高学年の頃、同級生達の間で一番始めにブラが必要になったり、体育の授業で胸が揺れて男子に囁かれたりしたのは軽いトラウマとなっている。

今でこそ、何とか己の裸身に矜持を抱けるまでに至ったが、それでも男からの欲情に満ちた視線は相変わらず苦手だ。

「うん？ どうして言っちゃいけないの？」

琴美の肉付きの良いふとももを撫で回しつつ、不思議そうに章史が問う。

「だって……そ、んな……恥ずかしい……です」

章史のペニスが膣壁を削っていないければ、今頃枕に顔を埋めているだろう。

「どうして恥ずかしがるの？ こんなに綺麗な身体なのに」

「え……あっ、ん」

章史の左手が伸び、はだけた乳房にそっと指を這わせる。

「大きくて柔らかいおっぱいだし、腰だって細く括れる」

「んっ……章史、様……」

胸の輪郭を撫でていた指が脇に降り、そのまま上体の稜線をなぞって腰を撫でる。

「丸いお尻に、むちむちしたふともも——」

指先で軽く触れていた手を広げ、章史は掌全体を用いて女の臀肉に指を沈ませる。

そのまま脚線に沿ってふとももを滑らせると、少年は満足気にふくらはぎに頬をすり寄せた。フレンチベージュのパンティストッキングが頬の産毛に絡まり、サラサラと軽やかな音を爪弾く

（柔らかい頬が……脚に擦りつけられてる……）

幼い肌と目に見えない産毛が、ナイロンの繊維越しに琴美の美脚を撫る。こそばゆい快感が女の肌理に浸透した。

「それに、男を悦ばせるとつても良いまんこを持つてる」

熱と痛みの席巻する膣内で、肉棒がググツと力強く引き上げられる。

（身体が……持ち上げられて……）

女体が浮き上がるほどではない——けれど、自分の身体が少しだけ軽く感じる力強い勃起が、膣の天井を強く押し上げる。たったそれだけで、どれだけ章史が強い性欲を琴美に抱いているのがありありと伝わってきた。

（こんなに……興奮しているなんて……）

美女の肉体に獣の欲情を掻き立てられていると、少年の雄渾な怒張が何よりも雄弁に伝えてきた。

琴美に対する男の視線は、常に仄暗い暴力を孕んでいる。それを本能的に恐れていたからこそ、琴美は牝を引き寄せる自分の身体が好きでは無かった。

(それなのに——)

女子大生のふともを抱く腕に力が籠もった。少年のピストンが力強さを帯びる。「琴美みたいな魅力ある女を犯せて、凄く嬉しいよ」

牝の本能を少しも隠そうとしない、率直な欲求が琴美に投げかけられる。

美辞麗句の裏に隠された欲情の滾りは、章史の声には潜んでいない。

琴美を抱いて開発したいと、飾らない言葉をストレートに紡いでくる。

(それなのに……私は——)

痛みで視界が歪む中、琴美は濡れた瞳で章史と視線を絡ませる。十九歳の女を犯す少年の双眸は、曇りの無い純粹な悦びに満ち溢れていた。

(小さな男の子に……教材としてレイプされているのに……)

自分の身体を大喜びで貪る無垢な少年に、膣を穢されている琴美はほんの少しだけ女としての幸せを感じてしまった。

「んっ、んんっ……あ、ああっ」

微かに胸を温めた悦びは激しさを増した少年の腰使いにより、女肉を騷る波濤に呑

み込まれる。

「本当はもつと琴美の処女まんこを味わっていたいけれど、次は雪奈を犯さなきゃいけないからね。そろそろ出すよ」

「あっ……章史様……んっ、出すって……」

何もかも初めて尽くしの琴美には「出す」の意味が咄嗟に理解できない。

それが、今まで使用されることのなかった保健体育や生物学の知識と結びつく前に、章史が言葉が続けた。

「射精する——ってことだよ。琴美のまんこに、僕の濃くて新鮮な精子をたっぷり注いであげる」

牝の子種が牝の揺籃に向かって吐きかけられる——自分の身体が本当の意味で男に染められると告げられた途端、琴美の心臓が急激に冷え込んだ。

「やっ……だ、駄目ですっ……な、膣内に出しちゃ……駄目っ」

「大丈夫だよ。避妊薬は飲んでいるでしょ？ 妊娠のリスクはないよ」

「でもっ……んっ、んんっ……」

そんなことはわかっている。どれだけ大量の精液を注がれても、今の琴美は懐妊することはない。

(この子は、雪奈が言うほど嫌いになれない……けれど——)

膣内射精が——怖い。

心の底から受け入れていない男の生殖液を、女体の中枢へと注がれるのを、女子大生の身体は認めていなかった。

薬を服用することによって、会って間もない男に胤を撒かれる危機を回避できる。

だが、避妊の安堵にばかり気を取られ、女の聖域が芯から男に凌辱される事態を忘却していた。こんな明瞭な事実にも、この時になってようやく琴美は気付き慄然する。

「あっ、んんっ……章史、様……んっ、くう……」

章史が膝の裏を持ち上げ、琴美の身体を大きく折り曲げる。男が正面から女に乗りかかり、力任せに犯す姿勢が作り上げられた。

「やっ、ああっ、んっ……深い……っ、んっ……」

股間が上を向き、淫液と破瓜の血にまみれた膣穴を杭と化したペニスが穿っていく。女の秘花が満開となり、卑蜜に濡れた花卉がうっすらと部屋の明かりを反射させた。

「あっ、んっ……やあっ……くうんっ」

腰が一突きされるごとに、章史の重みが強く琴美の性器にのしかかる。

「僕の子種袋がパンパンに張っているのがわかる？ もうじき、ここから熱い精子が

ちんぽに流れ込むんだよ」

「ん、きゅっ……あ、章史様の……精子が……ああっ」

身体が折り曲げられ、力強い挿抜に紛れてしまい注意を払えなかった。陰茎にぶら下がるように垂れていた少年の精囊は、いつの間にか硬く丸まり、肉の胡桃と化して琴美の会陰を叩いている。

(ああ……男の子の赤ちゃんの素が……おまんこに入ってきてちやう)

章史の絶頂が近づくにつれ、灼熱を帯びた精棒は益々硬くなってきている。破瓜による鮮血と膣壁を保護するために分泌された愛液を、蜜路の中で肥大化した卑頭が掻き混ぜていた。

グチュグチュと卑猥の溶存した音が結合部から掻き出され、濃密な生殖欲求を抱えた泡が湯気と共に弾け飛ぶ。自分が牝であると知らしめる獣臭が、琴美の鼻孔に焼け付いた。

「とろとろの熱いザーメンを、まんこから溢れるくらいたっぷり注ぐからね。琴美の中に僕の印を焼きつけてあげる」

「んっ、やあっ……章史様っ……あっ、ああっ」

ズブリ——突き刺された精棒が膣の最奥に当たり、鋭く子宮口を抉った。章史の躍

動感に溢れた腰使いによって、小さな股座がねじ込むように旋回させられた。

(子宮を……赤ちゃんを育む部屋を、こじ開けようとしているっ)

内臓が強引に捻じられていく感覚が、女の本能に警鐘を鳴らし四肢を暴れさせる。しかし、幾ら十一歳とはいええ、少年の全体重がかけられた両脚は容易に動かせない。身体を折り曲げられているため上半身に力が入らず、女の両腕はシーツに波を立てせながら無意味に布地を掻き乱すだけだ。

「まだ熟れていないまんこだけれど、これから僕が毎日調教してあげる。僕好みの最高のまんこに作り替えてあげるからね」

「そ、そんな……あつ、んっ……ん、くう……っ！」

章史の呼吸が荒くなる。少年がもう射精寸前の状態にあることは、幾ら処女だった琴美にも理解できた。

「イクよ琴美。男を知らない清潔なまんこを、思いつき僕の子種で汚してあげる。下の口で、主人のザーメン味をしつかり覚えるんだよ」

膣の中でペニスが痙攣している。硬く丸まった睾丸が発作的な収縮を始めた。

「琴美っ、ああ、出るよっ。まんこを締めてっ」

「あつ、あつ、んんっ、んっ、きゅ……っ！」

法悦に喉をひけらかす章史とは対照的に、痛みと衝撃が緋い交ぜになった感覚に席卷され、琴美の指という指が強く丸められる。

「ああッ、イクッ。出るよッ、あ、ああッ、琴美ッ」

男の肉刀と女の媚鞘が融合し、章史が獣の雄叫びを放った。

ドブッ——粘りを孕んだ音に混じり、熱い胤汁が膣の最奥へ吹き付けられる。

「んんっ……精液が流れ込んで……あつ……やあッ」

柔肉を爛れさせる牡の毒汁に、琴美の艶やかな肢体が戦く。

ドクッ——ドクンッ——ドク……。

突き立てられた卑幹が熱い脈動を打ち、感覚が摩滅しかけた淫路を介して雄々しい猛りが女体に伝わってくる。咆哮する亀頭が発作的に跳ね上がる度に、とぶとぶと新鮮な子胤が吐き散らされていく。

「ふう……ごちそうさま。琴美の処女、美味しかったよ」

何億もの精子を女の媚芯に注ぎ込んだ少年は、反っていた身体をゆっくりと戻し熱い吐息を一つ吐くと、喰ったばかりの女体の上に気怠げに覆い被さった。

(おまんこに男の子の胤が……ああ、いっぱいになってる……)

ドボッ——。

最後に腰を強く震わせて、章史は射精路から最後の一滴りを終える。

ゆっくりと柔肉の吸い付いたままの肉棒が引き抜かれた。白く泡立った愛液と処女の鮮血が交じった混合液が、薄桃色を帯びて少年の性柱に纏わり付く。朱く裂けた穴から大量に噴射された胤汁が逆流し、とろとろと会陰に沿って卑猥な滝を作った。

愛液と精液が混ざり合い、情欲に塗れた交尾の匂いが揮発する。破瓜の鮮血が混じったピンク色の泡がシートへと染み込んでいった。

「これから毎日毎日まんこを犯し尽くして、僕好みの牝にしてあげからね。琴美」

精根使い果たした琴美は、虚ろな光を双眸に宿す。極上の初物を平らげた少年はくすくすと笑い、邪気の無い笑顔で女を眺めた。

〈体験版終了〉